【13】

| | |
|---|---|
| 氏　名（本　籍） | 鄭（ちょん）　錦（くむ）　子（じや）（韓　国） |
| 学位の種類 | 教育学博士 |
| 学位記番号 | 博甲第502号 |
| 学位授与年月日 | 昭和63年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第1項該当 |
| 審査研究科 | 教育学研究科 |
| 学位論文題目 | 日本におけるモンテッソーリ教育理論の受容に関する研究<br>――河野清丸を中心にして―― |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　査 | 筑波大学教授 | 教育学博士 | 松島　鈞 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | | 白石晃一 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | | 鈴木博雄 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 教育学博士 | 福沢周亮 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 教育学博士 | 成田十次郎 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 教育学博士 | 井田範美 |

## 論　文　の　要　旨

本論文は2部12章，本文284ページ，註釈および参考文献30ページ，計314ページ（1ページ当たり1200字で，400字詰め原稿用紙約942枚に相当する）よりなっている。

本論文はマリア・モンテッソーリ（Maria Montessori，1870～1952）によって開発・形成された「モンテッソーリ・メソッド」の教育理論を体系的に集約・整理し，大正期の代表的なモンテッソーリ研究者である河野清丸（1873～1942）の研究成果との対比を通して，モンテッソーリ教育の日本への受容の典型を確かめることを目的としたものである。

第1部は，モンテッソーリ教育学の体系をモンテッソーリの著書によって分析・整理し，モンテッソーリ教育学を構造的にとらえることを意図した研究である。その際，本論文はモンテッソーリの教育学を教育理念と教育理論との二領域に分け，それぞれを体系的に理解し，構造的に把握しようと試みている。ここで，教育理念とは，教育の理論と実践の二面にかかわってなされる，望ましいとされる，ある程度一般的な価値指向を意味し，教育理論とは，教育の主体・客体や実践の場や分節の描造や過程に関して，その本質の説明，法則性の把握，あるいは具体的な実践の指標を示す体系的な知識のことである。そして本論文はモンテッソーリの教育理念の基本を，(1)自由の原理，(2)自己教育の原理，(3)感覚体験の原理，(4)個性発揚の原理としてとらえ，教育理論については，(1)教育の本質と目的，(2)子どもの本質，(3)教師のあり方，(4)教育内容論，(5)教育方法論の5つの枠組

みをもつ構造として把握している。

第2部は，日本におけるモンテッソーリ教育理論の受容についての研究であり，具体的には，最初の時期すなわち大正期の河野清丸によるモンテッソーリ教育理論の紹介と受容についての考究である。そこでは，第1部の研究に基づき，(1)教育理論構造の学的認識　①価値指向と理論との区分，②教育学のあり方，③教育の理念，および(2)教育理論の枠組みと内容　①子ども，②教師論，③教育内容論，④教育方法論を指標として設定し，分析を行っている。

最後の結論においては，本論文を総括して研究過程と成果を要約している，まず，第1部にかかわっては，(1)モンテッソーリ教育学の構造は教育理念と教育理論の統合体として把握されること，（この場合，教育方法は教育理念，とりわけ教育理論の実践的展開の面を示すものとされる。）(2)教育理念は先述した4つの原理が基本をなしていること，(3)実験的諸科学の成果を取り入れた科学的教育学の構築と，それに基づく教育方法の開発ならびに活用による教育実践の質の向上を教育の目的としていること，および(4)子どもの自己活動の助成を教育の本質の中核として認識していることなどの諸点にモンテツソーリ教育学の特色を見出している。また第2部については，(1)教育理論構造の学的認識のレベルでは河野とモンテッソーリとの間に若干の食い違いがあること，(2)しかし河野の説く自動教育の原理はモンテッソーリの自己教育の原理と同軌であること，(3)また河野はモンテッソーリの主張する自由の原理に基づいて個別教育や興味教育を推進するなど，モンテッソーリの教育理念に導かれて彼の教育理論を用意し展開していったこと，(4)河野はモンテッソーリの子ども観を全面的に支持し，子どもの自発活動を信頼し、自己学習を期待したこと，(5)教師のあり方についても，河野はモンテツソーリの教師論から科学者精神を紹介しただけでなく，特に子どもに対する教育愛（子どもの自発的で独立的な自己活動の生成援助とそれへの献身）を自らの教育論として発展させたこと，(6)教育内容とその編成に関して，河野はモンテッソーリを正しく理解していたが，日本の国家主義的教育の基本に抵触する場合には，彼の国家主義者としての限界を有したこと，(7)教育方法に関しては，学習に当たっての自由の確保と環境の整備と教具の開発について河野は正しく理解していたことを指摘し，全体として河野はモンテッソーリの教育理論を深化・充実させることによって自らの自動主義教育論を用意し，これを実践面において展開したことを明らかにしている。

## 審　査　の　要　旨

モンテッソーリの教育学を的確に把握し，認識することは，モンテツソーリ教育の正しい普及と定着のために不可欠な課題であるが，モンテッソーリ教育学の整合性ある体系化はまだ不十分な状態である。本論文は前提的課題としてこの仕事に取り組み，独自の立場からモンテッソーリの教育学を理論的に集約・整理している。また中心課題である河野清丸によるモンテッソーリ教育理論の受容についても，河野の著作や所論に精密詳細な考察を加えることによってモンテッソーリ教育理

論受容の実態を明らかにし，教育史研究に大きな貢献をなした。これらの点は高い評価に値いするものである。

しかし，モンテッソーリ教育論の整合的理論化と河野による受容の解明に専念するあまり，19世紀末から20世紀初めにかけての欧米の教育の動向や明治以来のわが国の教育の歩み，殊に幼児教育の推移についての目くばりがやや手薄になったことは否めない。今後，これらの点について更に十分な考察を加え，研究を整備することが望まれる。

よって著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。